



その後の<らいぶら> : 2002年の活動

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2012-02-16 キーワード: 作成者: 内藤, 一志, 吉井, 明 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00010448 |

その後の〈らいぶら〉—2002年の活動—

内藤一志, 吉井 明
北海道教育大学函館校

Annual Report 2002 of “Libra”

Kazushi NAITO, Akira YOSHII
Hokkaido University of Education, Hakodate

Keywords : 学校図書館, メディア, 図書館, 学習会

1. はじめに—2002年の活動—

〈らいぶら〉は「子ども」と「メディア」に関わることをテーマとして取りあげる学習会である。2001年3月に活動を開始し、2年を経た。その設立の経緯と、2001年の活動の概要については、本紀要の第2号に「〈らいぶら〉の1年」として掲載した。本稿は、その後の活動を報告しようとするものである。

2. 2002年の活動

〈らいぶら〉は原則として毎月第3土曜日（午後3時から午後5時）に開催している。毎回報告者による「報告」があり、その後意見交流をするという形で進めている。先の「〈らいぶら〉の1年」と重複する点もあるが、2001年3月に始動してから、2002年12月までの〈らいぶら〉の活動について、実施日テーマ、報告者の一覧を示す。

2001年

- 第1回 3月17日 「みんなで読むということ—『朝の10分間読書運動』ってなんだろう？」
内藤一志
- 第2回 4月21日 「『学校図書館司書教諭講習プログラム』をつくる」
内藤一志、吉井明、山口好和
- 第3回 5月19日 「絵本を ぼくらは こう読んだ」
内藤一志、山口好和
- 第4回 6月16日 「大正期函館市民社会の再評価—岡田健蔵と函館図書館」
吉井明
- 第5回 7月21日 「読書と子どもの発達」
内藤一志
- 第6回 9月22日 「『学校図書館司書教諭講習』夏期講習の小括」
内藤一志、吉井明、山口好和

第7回 10月27日 「図書館でやってみたけれど」

木本裕子、畑中栄子

第8回 12月1日 「函館市中央生涯学習センター・中央図書館建設について」

安東璋二

第9回 12月22日 「三枚のお札―昔話のしくみ―」

高橋修

2002年

第10回 2月16日 「これからの図書館―文化遺産としてのWEB情報」

吉井明

第11回 3月16日 「地域の学校図書登録・管理システムのデモンストレーション」

吉井明

第12回 5月18日 「ちゃれんじ！アニメーション―お話のゲーム―」

内藤一志

第13回 6月22日 「総合的な学習と学校図書館の活用―全国学校図書館研究会へのアプローチ―」

新沼誠子

第14回 7月20日 「『ごんぎつね』をめぐるあれこれ」

内藤一志

第15回 9月21日 「2002年夏 学校図書館研究会 参加記」

伊庭日出樹、新沼誠子

第16回 10月26日 「函館市立図書館を考える―分室の運営はどのように行われているか―」

小倉彩子

番外編 11月16日 「地域の学校図書登録・管理システム―aRcsにさわってみよう―」

吉井明

第17回 12月21日 「メディアリテラシーとは何か」

内藤一志・吉井明

2002年も前年と同様に、学校図書館や図書館、メディアと教育を念頭にテーマを設定してきた。以下、前回の報告では行っていない第11回以降の活動について報告する。

2-1 第11回「地域の学校図書登録・管理システムのデモンストレーション」

吉井明の作成した「aRcs」は、学校図書館や子ども文庫などの、子ども達の学びに寄与することを目的とした地域ライブラリーの所蔵メディアを対象に、Webベースのインターフェースを用い、所蔵目録の作成と情報の共有化を容易にするためのシステムである。2002年3月には、北海道教育大学附属函館小学校と函館市立大森小学校（注1）の学校図書館所蔵データの登録作業を行い、試行的な利用段階にあった。そのシステムの概要説明とデモンストレーションを行った。出席者は12名。出席者には学校図書館の担当教員や子ども文庫を運営する人もいて、「みんなが利用できるシステム」に関心を寄せていた。

「aRcs」の詳細については、開発者の吉井が「aRcs：学校図書館・地域文庫カタログ化システム

の構想と開発」(注2)で報告している。

平成13年度から文部科学省は「学校図書館資源共有型モデル地域事業」として、全国23の地域を指定し、3年計画で事業展開を図っている。資源共有は図書や資料に関する情報共有と、図書や資料そのものの共有を意味する。多くの地域では情報共有のためにデータベース構築に取りかかっているが、システム開発やMARC購入に多くの予算を投じていると思われる。そのような動きの中で、データの共有性と共同による目録化というaRcsの方向性は、より「共有」性を求めたものといえるだろう。

2-2 第12回 「ちゃれんじ！ アニマシオン—お話のゲーム—」

報告者は内藤。出席者は読書へ誘う方法として近年脚光を浴びている「読書へのアニマシオン」について、『読書で遊ぼうアニマシオン』(モンセラット・サルト著、佐藤美智代・青柳啓子訳、柏書房、1997)、『アニマシオンが子どもを育てる』(増山均、旬報社、2000)、『読書へのアニマシオン75の作戦』(モンセラット・サルト著、宇野美和訳、柏書房、2001)により、その概要を紹介した。

『ぼくらは物語探偵団』(渡辺泰史著、柏書房、1999)に代表されるように、日本では物語と親しむためのゲームとして捉えられ、また学校教育の中で活用する傾向がある。しかし、増山の著作からは、「アニマシオン」の活動が盛んなスペインの教育風土とともに、本来「アニマシオン」は社会的な教育活動の中から生まれてきたものであり、その意味では「エデュカシオン」(学校教育)とは別の背景をもつものであることが分かる。また、サルトによれば、「アニマシオン」が教授法とは異なる、「子どもの力を引き出す」教育そのものとして捉えられており、彼我のその方向性の異なりを指摘した。

合わせて、実演として内藤がアニマシオン初挑戦をした。素材は『ごんぎつね』と『今昔物語集 巻25第12』「馬盗人」(通称)を用いた。「ごんぎつね」では登場人物の行動の間違い探しや記述の一部からの記憶の再現、「馬盗人」では抜き出した記述の整除、音読の際に省いた箇所を指摘などを行った。(注3)

2-3 第13回 「総合的な学習と学校図書館の活用—全国学校図書館研究会へのアプローチ—」

2002年7月末に開催された全国学校図書館研究会での分科会発表者である新沼誠子氏(函館市立中部小学校教諭)がプレ発表として報告を行い、それを出席者で検討した。出席者は12名。

障害者との交流を中心とした「ふるさと ふれあい 学びあい」というテーマによる総合的な学習の実践と、それを通して抽出された問題点の報告である。実践は、導入として、乙武洋匡著『プレゼント』(中央法規出版、2003)の読み聞かせ、子ども達の障害をもつ人と接した折の経験についての意見交流を行う。ついで、盲導犬や手話を窓口にして、目の不自由な人への理解を促すビデオ視聴や、外部講師による講話、福祉施設の見学を経て、障害をテーマとして課題を設定してグループ形成を行い、図書資料を中心とした調べ学習と発表会の実施という展開である。

その実践を通じて明らかになったのは、資料の絶対量の不足である。学校図書館と公立図書館の資源共有に向けた動きがにぶい函館市にあって、調べ学習を中心とした活動の実施の困難性を指摘し、さらに教師個々が所有する学習テーマについての知見や情報の限界も浮かび上がってきた。広領域の学習テーマについては、学習者だけでなく教師もレファレンスを必要とする。それ

に応える人や機関がないということである。そんな限られた環境の中で、教師が知恵を出し実践を展開するための工夫を行っている「現状」の報告であった。

出席者からは、学校図書館と公立図書館の連携の重要性や、かつて函館市の小学校の教師が取組んだ実践の紹介などがあり、実践の継承と交流の乏しさについての指摘がなされた。

2-4 第14回 「『ごんぎつね』をめぐるあれこれ」

内藤が報告。出席者は10名。現在、小学校で用いられる国語教科書は5種類あるが、その4年生の下巻全てに『ごんぎつね』は収められている。全国の子どもが読む『ごんぎつね』、その作品の成立について、府川源一郎『「ごんぎつね」をめぐる謎』（教育出版、2000）に基づき報告をし、さらにその作品展開の特色について述べた。出席者からは、南吉が『赤い鳥』に投稿した草稿「権狐」の方が、鈴木三重吉の手が入った『赤い鳥』掲載のものより、はるかに魅力的であるなどの意見が出された。

2-5 第15回 「2002年夏 学校図書館研究会 参加記」

2002年夏に行われた、「全国学校図書館研究大会」と「学校図書館問題研究会」に出席した伊庭日出樹氏の報告を中心にし、全国学校図書館研究大会に参加した木本裕子氏、発表者だった新沼誠子氏からの報告があった。出席者は11名。

伊庭氏は「図書館研究大会」において複数の分科会出席を通して、総合的な学習における情報収集やプレゼンテーションの入門的な学習内容を設ける必要があること、学校図書館におけるレファレンス機能を実現する必要があることを痛感したという。

ついで「図書館問題研究会」では、平成15年度から12学級以上の学校で必置となった学校図書館司書教諭に対する発令の仕方の異なりや、学校司書や司書教諭の配置が進んでいる地域と、そうではない地域との意見交流の中で、学校図書館におけるサービスの重要性を実感したとの報告があった。また、「司書教諭の専門性について」をテーマとした分科会では、司書教諭必置に連動して生じる学校司書の身分保障の問題や、学校図書館に関わる期間が発令によって限定されるであろう司書教諭と、学校司書のそれぞれの専門性の有無についての討論を通して、司書教諭の「専門性」や、その存在そのものについての認知の必要性があるとの見解を持ったという。

二つの研究会から通して見えてきた今後の課題として、「学校図書館より優先すべき事柄を論じる前に、学校図書館は教育活動を支える一本の太い柱であるという共通認識を広めていく必要」と、「インターネット上の情報に信頼を置き、他のメディアとの比較を怠る」などの問題状況に対し「メディアリテラシー」の必要性を指摘した。

2-6 第16回 「函館市立図書館を考える一分室の運営はどのように行われているか」

報告者は函館市立図書館の美原分室に勤務する小倉彩子氏。出席者は18名。小倉氏は函館市立図書館の本館、分館、図書室など図書館運営全体の概要、所蔵資料の特徴を報告した上で、現在勤務する美原図書室の実態に即しながら課題状況を述べた。

課題として指摘したのは、第一に図書館職員の研修機会が乏しいこと。第二に市内四か所にある図書室の職員全てが嘱託という決して安定した身分ではないこと。その関係上、図書室運営での日常的な問題点を常に本館や教育委員会の指示を待たなくてはならず、業務がスムーズに運ば

ないことがあること。第三に市立図書館とその下部組織である図書室全体が電算化されていないことから、各図書室が少ないスタッフで目録化作業をしなくてはならず、レファレンスサービスに支障をきたしていることをあげた。

さらに、要望として学校との連携の必要性をあげた。ある日突然、小学生が特定のテーマに関する本を求めて分室を訪れ、該当する資料を貸し出した後に、続々と同様の要求をする子ども達が訪れ、「早い者勝ち」状態になってしまうことがままあるという。学校から一報あれば、一時閲覧のみの状態にして、多くの児童が利用できること。さらに、どのような資料を求めているかを事前に連絡を受ければ、それに即して選書購入が計画的にできることを述べた。本稿2-3で先述した新沼氏の報告には、学校の教育活動に公立図書館を活用する上で、資料がより充実する必要があるとの要望があったが、互いの情報交流によって実現していく可能性をもつことへの示唆ともなった。

出席者からは、分室によって選書の異なりやサービスの異なりについての質問があったが、小倉氏からは、職員の研修が徹底されていないことから来る課題であり、選書が職員に委ねられ、さらにその職員が分室間で移動することから、どうしてもでこぼこが生じるとの応答があった。小倉氏が報告した函館市立図書館および分室運営の持つ課題が、端的に露見している問題であった。

2-7 番外編「地域の学校図書館登録・管理システム—aRcsにさわってみよう—」

本稿2-1で先述したaRcsを実際に操作してみようということで、番外編として開催。開発者の吉井がインストラクターとなり、15名の出席者がそれぞれコンピュータを前にし、テストユーザーとして何冊かの本のデータ入力を試みた。「ISBN」、「バーコード」、「NACSIS Webcat」、これまで身近ではなかった図書のデータをめぐる、言葉や組織、そしてデータの所在やその構成など、肌で実感しながらの時間だった。

2-8 第17回「メディアリテラシーとは何か」

出席者は8名。当日は『メディアリテラシー』（岩波新書）の著者、菅谷明子氏のインタビュー番組を視聴し、「メディアリテラシー」をめぐる基本的な事柄を学習する予定であったが、番組が配信されないことから急遽予定を変更し、内藤が菅谷氏の『メディアリテラシー』の概要を報告し、吉井が自身の担当する授業科目「メディアリテラシー基礎演習」に基づきながら、「リテラシー」という言葉の背景、「メディアリテラシー」が生成する文化的な背景について述べた。

3. 2002年の活動について

昨年以上に、多くの方の助力を得て運営してきたくらいぶら>であった。地域、公立図書館、学校図書館、そしてそれを利用する人、携わる人、多くの「面」を持つ人の参加を得て、意見の交流が実現できている。

裾野が広がっているとは言い切れないものもあるが、「知らないことを知ろう」とする活動が、次の展開を生むという状態である。ささやかだけれど、継続していることを自負して、2003年の活動を進めていきたい。

注

1. 2002年4月から函館市立東川小学校と統合し、函館市立あさひ小学校となった。
2. 『情報処理センターブルティン』（北海道教育大学情報処理センター紀要）第7号、2002.3
3. 「馬盗人」を扱った実践については中村純子「アニメーションで古典を楽しむ」『学校図書館』610号、2001.8を参照